

〔論 文〕

生産的労働論争批判 (Ⅱ)

馬 場 雅 昭

目 次

はじめに

I 都留・野々村説, 上杉・廣田・田沼説批判

II (補) マルクスの生産的労働論

1. マルクスの労働観, 生産的労働論
2. マルクスの使用価値論, 物質化論

III 中村隆英説批判

IV 山田秀雄説, 副田満輝説批判

1. 山田秀雄説批判
2. 副田満輝説批判

以上一前号

以下一本号

V 遊部久蔵説批判

1. 遊部氏の使用価値観, 生産観
2. サービス労働における二つの規定の関係

VI 西川清治説批判

1. 西川説の概要と西川氏のサービス観
2. 「資本にやとわれる不生産的な個人的サービス労働者」について
3. 「典型的な本来の不生産的なサービス労働」
4. 資本制的サービス生産

VII 橋本 勲説批判

1. 橋本氏の問題意識
2. 生産的労働と不生産的労働
3. 二つの規定の相互関係。橋本氏によるその歴史的解明, 論理的解明
4. 方法論の問題

結びにかえて

V 遊部久蔵説批判

副田満輝氏より4年早い1952年に遊部久蔵氏はマルクスの古典を確認し, 生産的労働概念の確立のためには本源的規定, 特殊資本制の形態規定という「全面的把握を…必要とする⁶⁶⁾」との結論に到達さ

れる。さらにその5年後には次のような理論を樹立される。

V-1 「…生産的労働は物質的生産にかかわるものであって非物質的生産にはかかわらない。ここで物質的生産というのは労働の結果が労働生産物をもたらすような生産である。換言すれば、使用価値または財の生産である。…非物質的生産においては労働の結果が労働生産物をもたらさない。換言すれば労働それ自体が使用価値である。いわば生産と消費との間に物が介在せず、生産即消費である。非物質的生産における労働力の機能が不生産的労働である。私見によれば、『サービス』(service, Dienst [leistung])とはこのような不生産的労働にほかならない。」(遊部 [1957] 2-3 ページ。傍線—引用者。以下—同様)

本源的規定と歴史的規定の統一関係を物質的生産に従事する労働(厳密にいえば産業的労働)のみが価値を、したがってまた剰余価値を生産するという点に見出しうるとし、次のような説明を付け加えられるのである。

V-2 「なにゆえにサービスは価値を形成しえないか?…サービスはその行為の瞬間に消失し痕跡をのこさないからである。…この種の労働は対象化されないからである。元来価値は使用価値によって担われるべきものであるが『使用価値はつねに一つの自然的基体をふくんでいる。』生産の物的成果が生まれず、むしろ生産行為そのものが使用価値である場合には、価値の形成される余地はなくなる。価値は対象化され、物質化され凝結された抽象的・人間的労働であるということがあらためて確認されねばならない。したがって価値を形成しうる労働は物質的生産に従事する労働(但し労働過程に属しない作家や画家の労働はのぞかれる)ということになる。」(遊部 [1957] 8 ページ。傍点—原文。以下—同様)

「価値を形成しうる労働は物質的生産に従事する労働」であるのにたいし、「その行為の瞬間に消失し〔労働の—引用者。以下—同様〕痕跡をのこさない…対象化されない」で、「生産行為そのものが使用価値である」サービス労働(遊部説においてはサービス)の生産観、使用価値観から見ることにしよう。

1. 遊部氏の使用価値観、生産観

遊部氏の見解によれば、物質=物体、使用価値=物体に「対象化」された使用価値、物質的生産=物体の生産、対象化=物体化・物財化に矮小化されている。

それにしても、「非物質的生産においては…労働それ自体が使用価値」であり、「生産それ自体が使用価値である」というのは、遊部氏の誤解である。労働それ自体は価値ではないように、労働自体も使用価値ではない。

つまり「流動状態にある人間的労働力、すなわち人間的労働は、価値を形成するが、しかし価値ではない。それは…対象の形態において価値となる⁶⁷⁾。」遊部氏も副田氏と同様、労働過程そのものと、労働過程の結果たる生産物を区別⁶⁸⁾しないことから混乱が生じている。

サービス労働(遊部氏の表現では「サービス」としておられるのは、誤謬である)は「その行為の瞬間に消失し痕跡をのこさない」「対象化しない」というのも、遊部氏の誤解である⁶⁹⁾。

マルクスは、『剰余価値学説史』『直接的生産の諸結果』において「布を買ってきて裁縫職人を呼びよせ、この布をズボンに転形するという彼のサービス(すなわち彼の裁縫労働)の支払をする…⁷⁰⁾」場合をあげている。ここでのサービスは、疑いもなく物体的生産(遊部氏流に言えば物質的生産)であり、裁縫労働はズボンという物質的財=物体に対象化される。それにもかかわらず、遊部氏によれば、この裁縫労働はサービスたりえないことになろう⁷¹⁾。画家や作家の労働が「労働過程に属さない」ため、「物質的生産に従事する労働」から除かれるのも、上記のことと変わらない。

ある労働が物体生産労働かサービス労働かの相違は、物体に「対象化」(素材主義的観点から見ても)するか否かということではなく、生産結果の提供＝受取の対象が物体であるか、流動状態のままだと一般に理解されている有用的効果であるかにかかっている。そう見なした方が、現実の理解においても、マルクスの理解においても、スッキリするように思われる。

料理やズボンに労働が「対象化」しても、売買されるものが調理された物体、ズボンという物体でなく、それらを生産するという労働行為のように見えるもの・流動状態のようにみえるもの、それは「サービス労働」である。ところが、「純粋に個人的消費目的のための個人的サービス」の場合、売買されるものはズボンでもなければ、流動状態の労働＝サービスでもない。それは「労働力」である⁷²⁾。

『資本論』第1巻における一般的定式としては、確かに価値は、物的基体に対象化された抽象的・人間的労働とされている。ところが、対象化＝物体化・物財化という見地を貫徹し、サービス労働にもそのまま機械的に適用すると、マルクスが労働の物質化を素材主義的に理解すべきでない⁷³⁾と展開した論理⁷³⁾、および「生産過程の生産物が新たな対象的生产物でなく商品でないような⁷⁴⁾」自立的産業部門としてあげた交通業に関する指摘が理解出来なくなってしまうであろう。

2. サービス労働における二つの規定の関係

次に、生産的労働の本源的規定と歴史的規定という「二つの規定をバラバラにとりあげるのではなくてその統一において把握すること⁷⁵⁾」が重要だ、と主張する遊部氏による資本制的サービス労働について吟味することにしよう。

V-3 「…非物質的生産のもとにおいて資本関係に包摂されているサービス提供者は、本源的意味では不生産的労働者であるが、資本主義の意味では生産的労働者である。…資本主義の意味での生産的労働とは…全く生産的労働の現象形態、資本主義社会特有の表現形態の規定にかかわると考えられる。そのような意味でそれはまさに生産的労働の形態規定をあらわしている。」(遊部 [1957] 12ページ)

「資本関係に包摂されているサービス提供者」は、遊部説V-1、V-2の流れからみれば、使用価値を作らない。だから、本源的意味では不生産的労働者であるが、資本主義の意味では生産的労働者であると主張されるのである。

遊部説を批判する前に、曖昧な点を指摘しておこう。

まず第1に「…資本関係に包摂されているサービス提供者」なる概念。資本制的生産関係の下においてサービスを生産し提供するのは、サービス労働者ではなく資本家であること⁷⁶⁾。ついでながら言えば、サービス労働者が提供するのは、サービスではなく、サービスを生産するのに不可欠な契機たる労働力である⁷⁷⁾。論文の前後関係から判断して「…資本関係に包摂されているサービス提供者」とは、資本関係に包摂されたサービス労働者のことだと理解して論をすすめよう。

次に「資本関係に包摂されているサービス提供者は、本源的意味では…資本主義の意味では…」と表現された時の「意味」の意味する概念、特に「資本主義の意味では…」ということ。これを「個別資本家の意識(主観)にとっては」と理解されないこともないが、従来どうり「本源的規定」では、「(特殊)資本主義的(形態)規定」ではという概念だと判断して論をすすめよう。

遊部氏の主張には事実においても、マルクス理解においても、二つの誤りがある。

まず第1に、サービスが使用価値である⁷⁸⁾ことが理解されていない。このことの結果として、資本関係に包摂されているサービス労働者が「本源的意味では不生産的労働者であるが…」という主張となる。

第2に方法論上の問題である。本源的（一般的・普遍的）規定では生産的労働ではないサービス労働が、何故に、何を契機に特殊資本主義の形態規定では生産的労働になるのか、その理論的根拠は示しておられない⁷⁹⁾。生産的労働の本源的規定と歴史的規定という二つの規定を「バラバラにとり上げるのではなくてその統一において把握すること⁸⁰⁾」が重要だと主張される時の「統一において把握する」とは何を意味するのか。このことは、前稿で明らかにした⁸¹⁾。

遊部氏によれば「資本主義生産の目的は剰余価値の取得にある。それは必ずしも剰余価値の生産を意味しない⁸²⁾。」商業資本や貸付資本ならいざ知らず、剰余価値を生産しないで、どうして剰余価値を取得出来るのか。

その当然の帰結として「商業資本家はもとより、物質的生産になんら関係しない部門、芸術、科学、などの部門の資本家のもとにおける労働＝サービスも生産的労働としての意義を有する⁸³⁾」として、商業資本家の下における商業労働と「物質的生産になんら関係しない部門」の労働＝サービス（遊部説においては、サービスとサービス労働が区別されていない）も「生産的労働としての意義を有する」として、商業労働とサービス労働を同一視されている⁸⁴⁾。

それは「個々の資本家にとってはかれが取得する剰余価値が彼のもとで働いている労働者の搾取によって直接得られたものか、社会的総労働の再配分によるものかは、問うところではない⁸⁵⁾」という遊部氏の理論に基づくからである。

個別資本家にとってそのようなことはどうでもよい、というのはその限りにおいて正しい。しかし、我々が問題にしていることは、そのようなことではないのである。ある労働が生産的労働であるか否かは、その労働が資本に剰余価値を直接生産するか否かに関わっている。正に遊部氏が引用しておられる『直接的生産の諸結果』に解答がある。

V-4 「資本主義的生産の直接の目的および本来の生産物は一剰余価値であるから、直接に剰余価値を生産する労働だけが生産的で、直接に剰余価値を生産する労働能力の行使者だけが生産的労働者である。つまり直接に生産過程で資本の増殖のために消費される労働だけが生産的である。」(Resultate, 『諸結果』『マル＝エン選集』440ページ。国民文庫 109-110ページ。)

やはり、サービス労働と商業労働を混同される最大の原因は、サービス労働者（遊部説においては、「サービス提供者」）は使用価値を生産するわけではないが、「資本主義の意味では生産的労働者であるとはいえ、そうであるからといって剰余価値（＝価値）の生産者であるという意味ではない⁸⁶⁾」という遊部氏の基本的認識に基づくものであろう。

VI 西川清治説批判

「…不生産的なサービス労働も、資本に包摂されるかぎりには、国民所得の点でも無条件に生産的であるかに解する」見解が出現した時期に、「謂ゆるサービス労働をすべて生産的労働と解することに対して、若干の疑問を提起」する目的で、西川氏は1964年に「国民所得と謂ゆるサービス労働」を発表され、続いて翌年「唯物史観と生産的労働」を発表された。西川氏もこれまで批判してきた諸説と同じように、物質的財貨の生産および、物体生産と直接関連をもつサービス生産のみを生産的労働であるとされ、サービス労働を「物」を生産する労働と対立して把握されている。

1. 西川説の概要と西川氏のサービス観

まず、西川氏の所説を見るとしよう。

VI-1A 「…もともと如何なる意味においても生産と直接の関連をもたぬものがたとい資本によって包

撰されようとも…これにたずさわる労働も社会的には生産的とはよびえないであろう。…生産一というからには当然に物的生産一の本源的规定をはなれて、歴史的規定はありえない。」

VI-1B 「本源的意义における生産ないし生産的労働は…資本主義社会においては資本に包摂されて使用価値をもつ物的商品を生産することによって、同時に生産物に体化される価値および剰余価値を生み出すことであるといえる。ところで生産に対立するものは消費であるが、それは消費者自からによっても行われるが、謂ゆるサービスの多くはこれを助け、或いは補完する。これらの個人的サービス（「純粋に個人的消費目的のための個人的サービス労働」のことで、西川氏は「個人的サービス労働」とはしておられない—引用者）は、資本によって包摂されると否にかかわらず、社会的観点のもとでは不生産的である。」（西川清治 [1964] 64ページ。傍点—原文。傍線—引用者。以下—同様。西川氏は1年半後にもほぼ同じようなことを述べている⁸⁸⁾）

西川氏も、すべてのサービス労働＝不生産的労働論者と同様に、本源的规定による生産的労働とは物質的財貨を生産する労働のことであり、はじめからサービス労働は除外されている。サービス労働が使用価値を生産しないのは何故か、本源的规定で生産的労働に含まれないのは何故か、その説明は全然なされていない。サービスの性格についてこの引用文から読みとれることは、「消費を助け、或いは補完する」ものということである。続いて西川氏は次のようにも主張される。

VI-2 「だが、要点を先まわりして言えば…個々の労働を他から切りはなして、それぞれについてその労働対象との関係や利用効果のみを顧みるのではなく、社会的観点のもとに総過程の一環として、それがそこで占める地位と現実の機能を顧みて、生産の過程の一部に属するか、消費のそれに属するかが問題だということである。」（西川清治 [1964] 65ページ）

引用文VI-1A・B、VI-2で明らかになったように、西川氏によれば本源的规定における生産的労働とは、物的商品を生産する労働のことであり、ところが、分業の進展に伴い、「…個々の労働としては物的な労働対象と労働生産物を欠く」労働が発生する。この「個別的には物的な労働対象と生産物を欠くという意味での、俗に謂ゆるサービス⁸⁹⁾」を生産的消費目的のためのサービスと個人的消費目的のためのサービスとに区別し、前者の生産を生産的、後者のそれを不生産的とされるのである⁹⁰⁾。

問題にされなければならない論点は、生産されたサービスではなく、その生産に必要な一契機たるサービス労働である。

サービスとは、サービス労働とその生産に必要な契機たるその労働手段、労働対象とを合体させ、生産された生産結果であり、生きた労働と死んだ労働との合体物である⁹¹⁾。この合成物をサービス資本家は生産し、販売する。消費者はこのサービス生産物を購買し、消費するのである⁹²⁾。このサービスが生産的に消費されるか否かは、サービス労働の生産的（あるいは不生産的）性格とは全く別の問題である⁹³⁾。

また、サービスの生産過程と生産過程の結果とは理論上区別すべきことも別著で明らかにした⁹⁴⁾。西川氏は、サービスの生産過程とその生産結果、つまりサービス労働とサービス生産物を混同しておられるか、さもなければ、無理解かのいずれかである。

西川氏は、長岡豊氏⁹⁵⁾を批判する際「生産的労働の把握にとってはこの点（『物』を生産するか否かということ—引用者）こそ重要である⁹⁶⁾」と力説されるのである。問われているのは、生産過程の分析であるにもかかわらず、生産過程の結果たる生産物の観点から、つまり「物」と「もの」を区別することから、議論を始められるのである。長岡批判が当を得た部分がある⁹⁷⁾にせよ、説得力に欠けるのはこのためだと思われる。

2. 「資本にやとわれる不生産的な個人的サービス労働者」について

次に、西川氏は歴史的規定の問題に移られる。長文であるが引用しよう。

VI-3A 「生産的労働は資本と交換され、直接に生産過程で資本の増殖のために生産的に消費される労働…不生産的労働は、資本には転化しないところの個人の収入と直接に交換され…何らかの個人の欲望を満足せしめるために消耗的に消費されてしまう労働である、といわれる。…その逆は必ずしも真ではなく…重大な謬りに陥るおそれさえある。資本にやとわれる不生産的な個人的サービス労働者の場合がとくに代表的な例である。」

VI-3B 「つまり右の命題は…流通過程に属するある特定の分野が産業資本から分化し独立の企業として行われる場合や…謂ゆる不生産的サービスの資本主義的経営の増大といった事情などについては、度外視されている。だから右の命題を機械的に適用すれば、利潤の獲得をめざす資本によって雇傭される限りは、純粹流通に掌わる労働も、消費享楽を助けるに過ぎないサービス労働も、あたかも例外なく生産的労働であるということになる。」

VI-3C 「…全く生産にかかわりのないサービス労働が資本によって雇われるに至った瞬間から生産的労働になると言うことも社会的観点のもとでは首肯しがたい所である。」(西川清治 [1964] 65-66ページ)

西川氏の理論には、肯定しがたい誤謬が含まれている。

第1に「資本にやとわれる不生産的なサービス労働者…」(内容は、資本に包摂され、個人的消費目的のためのサービスを生産する労働者のこと—その特色を示す概念が必要なら「個人的消費目的用資本制的サービス労働者⁹⁸⁾」とでも呼ばれるべきもの)とは、如何なる意味か。

第2に、「全く生産にかかわりのないサービス労働が資本によって雇われるに至った瞬間から生産的労働になる言うことも社会的観点のもとでは首肯しがたい」と指摘されている点。

第2の問題に答えることによって第1の問題にも答えることにしよう。「サービス労働は本源の規定からは不生産的労働であるが、資本に包摂され資本を富ますかぎりでは、歴史的規定からみれば生産的労働である」という通説に対する批判として主張されるのであれば、誤っているとは言えない。

西川氏の場合、まず第1に、生産的労働であるか否かの区別は、物質的財貨を生産するかどうかということであった。次に、サービス労働において生産的労働・不生産的労働を区別するメルクマールは「…利用効果又は有目的機能が生産過程の一環または継続として現実に機能しているか、或いは消費の過程の一部に属するかどうか⁹⁹⁾」という点にあり、しかも、このことが「基礎規定として必要¹⁰⁰⁾」であるというのである。

ところが、生産的労働論争の焦点は、常に労働力の売手と買手の関係であって、買手の貨幣の出所、生産されたサービスの使用目的ではない。このことは拙書¹⁰¹⁾において指摘した。生産されたサービスの「機能が生産過程の一環」として機能しているか、「消費の過程の一部に属するか」ということは、生産的労働論争においてはどうでもよいことである。つまり、貨幣と交換された労働力が剰余価値を直接形成するかどうか、直接に資本に転化するかどうかということにつきるのである。

純粹の流通に従事する労働の不生産性を解くことによって、サービス労働の不生産説を主張する西川氏の方法は誤りである¹⁰²⁾。

西川氏は生産=物体生産、サービス=消費享楽を助けるもの、サービス生産=生産に非ずと現実を無視することによって、自説を定式化されている。その必然的結果が「資本にやとわれる不生産的な個人的サービス労働者」(VI-3A)なる概念である。

「個人の収入と直接に交換され…何らかの個人の欲望を満足せしめるために消耗的に消費されてしまう労働」とは「資本にやとわれる不生産的な個人的サービス労働」(VI-3A)のことではない。それは

「純粹に個人的消費目的のために雇用される（資本関係に包摂されておらず、かつまたサービス生産に必要な労働手段も所有していない）個人的サービス労働者」、一例をあげれば家庭教師の労働のことである¹⁰³⁾。

西川氏は、生産結果としてのサービスとサービス労働とを区別しないことと相まって、使用価値も価値も、したがって剰余価値も生産しない純粹の商業労働とそれ自体の中に生産過程を含み、その結果として生産物（それは「物」でなく「もの」である）を生産するサービス労働¹⁰⁴⁾を混同しておられる。このことは、致命的欠陥であるというほかない。

3. 「典型的な本来の不生産的サービス労働」

次に、西川氏によって「典型的な不生産的サービス労働」とみなされている「本来の個人的サービス¹⁰⁵⁾」、不生産的サービス（労働）について考察してみよう。まず、西川氏が参考にされるマルクス理論の引用からはじめよう。

VI-T-1 「…生産的労働とは商品を生産する労働…、不生産的労働とは個人的サービスを生産する労働である。前の労働は売ることのできる物となつてあらわれ、後の労働はその作用中に消費されねばならない。前者は…物的形態で実存するあらゆる物質のおよび知的富—肉や書物—〔を生産する労働〕を含む。後者は、個人のなんらかの想像的または現実的な欲望を充たすような…あらゆる労働を含む。」(Theorien Bd. I. S.136. 青木書店 239ページ。国民文庫 第2分冊 45ページ)

このマルクスの理論を引用した後、次のように自説を展開される。

「本来の個人的不生産的労働」＝「個人的サービスを生産する労働」、「個人的消費目的のためのサービス（西川説においては、サービス労働とは言っておられない）」＝「作用中に消費され消費してしまう」・「何らの売ることのできるものをも生産しない¹⁰⁶⁾」ものである。西川氏のマルクス理解による主張は、当を得たものであろうか。

マルクスの言う「不生産的労働＝個人的〔消費目的のための〕サービスを生産する労働」というのは、今日支配的な資本制的サービス労働のことではない。それは、資本に包摂されず直接消費者個人の収入と交換されるサービス労働のことである。そこでは、サービス労働者がサービス生産に必要な労働手段を所有していないため、その所有者たるサービスの消費者（実はその消費者が、この場合生産の計画者・管理者である）の下で労働する¹⁰⁷⁾。

そのサービス労働は資本制的に営まれない故に、剰余価値を生産しない。それ故に、不生産的労働なのである。この場合、マルクスの理論展開の前提は、サービス労働がまだ資本に包摂されていないということである¹⁰⁸⁾。

つまり、物的商品の生産が資本に完全に包摂されている場合、収入は資本だけが生産し販売する物的商品と交換されるか、さもなければ、サービスと交換される（サービス部門は資本に包摂されていない）という前提である。そしてこの場合「(資本関係に包摂されずに—引用者) 直接に収入と交換されるようなサービスをおこなう不生産的労働者の大部分は、もはや個人的サービスだけをおこなう¹⁰⁹⁾」のである。つまり「このサービスの購買には、労働と資本との独自の関係がぜんぜん含まれていない¹¹⁰⁾」のである。

次に、サービス労働が資本に包摂された場合はどうであろうか。

VI-T-2 「ところで、その買手または充用者じしんにとって生産的である労働、たとえば劇場経営者にとっての俳優の労働のような労働についていえば、こうした労働は、その買手がそれを商品（物的商品のこと—引用者）の形態でなく、行動そのものの形態でのみ公衆に売るこ

とができるということにより、不生産的労働たる実を示すわけであろう。

このことを度外視すれば、生産的労働とは商品を生産する労働であって、不生産的労働とは個人的サービスを生産する労働である。」(*Theorien* Bd. I. SS.135.-136. 青木書店 239ページ。国民文庫 第2分冊 45ページ。)

つまり、マルクスによれば、資本に包摂されても俳優の労働のように、労働の結果が物的商品でなく、行動そのものの形態で公衆に売られるため、実際は生産的労働であるにもかかわらず、それは「不生産的労働たる実をしめす」のである。しかも、西川氏が引用されたマルクスの定式(本稿における引用 VI-T-2)には、「このことを度外視すれば」という前提がつけられているのである。

既に指摘したように、マルクスの「個人的サービスを生産する労働＝不生産的労働」とは、収入と直接交換される労働(正確には労働力)であるから、サービスの生産者がそのサービスの消費者なのである。「作用中に消費され消滅してしまうだけであって、何らの売ることのできるものをも生産しない¹¹¹⁾」のは、その買手が消費者だからであり、別の買手に生産結果たるサービスを販売しないからこそ、消費者をして消費者たらしめているのである。

以上が、西川氏による「典型的な不生産的サービス労働」の特質である。「典型的な不生産的サービス労働」とは、資本に包摂されず、しかも独立自営業者によって生産されたものでもないところの、「純粹に個人的消費目的のための個人的サービス」のことである。その限りにおいて、すべてに対して同意出来ないというわけではない。西川氏がこの規定を資本制的サービス生産にたいしてまで機械的に適用し、拡大解釈されないことが肝要である。

4. 資本制的サービス生産

独立のサービス資本家によってサービスの生産が行われる場合¹¹²⁾ について、西川氏は次の3点を指摘される¹¹³⁾。

第1に、サービス資本家とサービス労働者の間には、サービスと資本が交換される。

第2に、顧客には「何れもの価値物を与えることなく…サービスの価値を受取る」

第3に、サービス資本家についてみれば「何れの価値も剰余価値も生産されないにもかかわらず…利潤を手に入れる。」

ここまで来ると、西川氏の誤解は決定的なものとなる。順次検討してみよう。

第1に、サービス労働者とサービス資本家の関係は、サービスと資本との交換関係ではなく、サービス生産に必要な契機たるサービス労働力と資本との交換関係である。サービスの生産者たるサービス資本家が、労賃と引換にサービスを受取っていたのでは、資本家たりえない。サービスとはサービス労働の結果たる商品であるから、消費の対象(生産的消費であれ、純然たる個人的消費であれ)になっても、買手にとってはそれ自体として剰余価値追求の対象になるものではない。

第2に、生産されたサービス商品の顧客にたいして「サービスの提供によって想像的にか現実的にか何らかの欲望を満足せしめることはあっても、何れもの価値物を与えることなくして…サービスの価格を受取る¹¹⁴⁾」と西川氏は言う。そうだとすれば、「サービスをめぐる『交換関係』」は、経済学的には不等価交換どころか、「無価値なものに対する支払い」か、「犠牲的なもの¹¹⁵⁾」と言わざるをえないであろう。

西川氏の理論によれば、サービス部門においては労働価値説は通用せず、正常な交換関係は存在しないことになる。寄付・見舞い・祝い・カンパ等を除いて、等価交換を建前とする資本制社会においてはこのようなことはありえないであろう。

第3に、西川氏によれば、サービス資本は価値も剰余価値も生産しないのであるから、サービス

資本家が受取る「利潤」は、商業利潤と同じ様に第2次再配分だとして辻褃を合わせようとされる¹¹⁶⁾。

西川説によると「生産—というからには当然に物的生産」(本稿における引用 VI-1A)のことであり、サービス生産は最初から除外されている。

ところが、どうしたわけか「それ(本来の個人的消費目的のためのサービスを生産する生産的労働のこと—引用者)は個人の何らかの想像的または現実的な欲望をみたすような個人的サービスを生産する労働であり、したがってかような欲望をみたす使用価値または利用効果をもつが…¹¹⁷⁾」となっている。西川氏においては、サービスが生産されたり、されなかったりで全く一貫していない。

現実にはサービスが人間の何らかの欲望を充足させる使用価値を持ち、このサービスという使用価値が資本制的に生産され販売されているにもかかわらず、販売の側面だけを見て、サービス業と商業を混同しておられる。それは、サービスの生産過程とその生産過程の結果たるサービスを区別しないためというより、サービス労働には生産過程が包摂されているということを見落とすことから生ずる帰結であろう。

Ⅶ 橋本 勲説批判

保険労働が生産的労働であるか否かという本質をめぐって論争が重ねられていたとき¹¹⁸⁾、橋本 勲氏は「サービスと生産的労働」、「サービス労働の生産的性格—生産的労働論争批判—」を發表された¹¹⁹⁾。橋本説を吟味してみたい。

1. 橋本氏の問題意識

まず、橋本氏の問題意識を見ることから始めよう。

Ⅶ-1 「…保険労働の本質の問題は…保険労働の問題だけではない。…銀行労働、商業労働、教育労働等々を含めたサービス労働の本質をめぐる問題である。本稿は、保険労働をサービス労働として把握し、そのサービス労働が生産的であるか否かを考察する…。」(橋本 勲 [1965] 209ページ)

Ⅶ-2 「…われわれの関心は商業労働にあるが、ここでは論争の性質上商業労働に限らず、広くサービス労働として把握し、表現することにした。…

商業労働とサービス労働は、後者は直接に消費の対象になるサービスを生みだすが、前者はそうでない点において異なるという点について森下教授より御教示を頂いた。しかし、両者とも、その労働が生産物に対象化されず使用価値も価値を生みださない点において共通し、その点で物質的財貨を生産する労働と対立するので、本稿では一応立入った問題を捨象し、サービス労働という外延の広い概念の下に一括して論を進めたい。」(橋本 勲 [1963] 41-42ページ。傍線—引用者。以下—同様。)

以上が橋本氏の問題意識である。

本質をついた森下教授からの「御教示」は全く生かされていない。「御教示」の内容は、商業労働が価値の形態変化をもたらすだけで、使用価値も価値も生産しないのに対し、サービス労働はサービスという特殊な使用価値と価値を生産するということである。従って、商業労働は「サービス労働という外延の広い概念の下に一括して論を進めたい」というのは、出発点から賛同出来ない理論である。

まして、銀行労働や「保険労働をサービス労働として把握」するのは誤りであり、マルクス解釈の逸脱というほかない。これまで度々指摘したように、マルクスにおいては、サービスとは「一般に物としてではなく活動として有用であるかぎりでの、労働の特殊な使用価値の表現にほかならない¹²⁰⁾」

ものであった。

銀行業務における貨幣の貸し借り行為あるいは、「労働」が売買の対象となる「労働の特殊な使用価値」であるのか、提供と受取の対象は貨幣の貸し借り行為そのものであるのか。銀行業の収益が貨幣の貸し借り行為から得られとすれば、貸し借り行為の多い、つまり貸し借り操作、貸貸回転数の多い銀行が収益の高い銀行ということになる。

同様のことが物品賃貸業¹²¹⁾にも言えるはずである。貸家業について考えてみよう。家主が受取る家賃は、借家人に対して家を貸すという「労働行為」の価格表現であるのか。もしそうだとすれば、貸借行為のない、10年も20年も貸したままの家から家賃がその間、継続的に入るのは何故か、全く説明出来ないものとなる。

サービスとは、売買の対象が物質的財貨ではなく、一般に流動状態のままの使用価値と見なされている特殊な使用価値のことである。物品賃貸業の場合、あるのは時間を区切ったの貸借であって、それは売買の対象ではないのである。

2. 生産的労働と不生産的労働

サービス労働が生産的労働であるかどうかの論争を橋本氏は「生産的労働であるとする見解」「基本的には一応不生産的労働であるとする見解」とに分類し、前者をブルジョア経済学者、俗流経済学者の見解、後者をマルクス経済学者の見解であるとされる¹²²⁾。

しかしながら、労働価値説を前提にしながらも「サービス労働の性格をめぐってはかなり見解の相違がみられ…サービス労働は飽くまでも不生産的労働であることを強調し、他方では、サービス労働も一定の条件の下では、生産的労働であると主張する」のは、「生産的労働の規定に二つの観点がみられるからである¹²³⁾」と橋本氏は言う。

橋本氏による「二つの観点」とは「労働過程からみた一般的規定」＝第1の規定と、「資本家的生産の下での歴史的規定」＝第2の規定のことである。

橋本氏によればサービス労働＝不生産説は、主として第1の「一般的規定」を根拠とし、ごく一部のマルクス経済学者の中で「一定の条件の下では」サービス労働＝生産説は、第2の「歴史的規定」を根拠にしていることが多い¹²⁴⁾。森下二次也教授、崎山一雄氏の見解は「サービス（橋本氏は、サービス労働とはしておられない—引用者）を労働過程に即する一般的規定の観点からみるのではなく、生産的労働の歴史的規定すなわち剰余価値観点からみて生産的労働となす見解¹²⁵⁾」であるという橋本氏の理解は、はたして正確なものであろうか。

橋本氏によれば、サービス労働が生産的労働であるか否かという論争は、あたかも依拠する規定の相違性に基づくと理解されているようである。方法論の問題とも関連するので、後であらためて取上げたい。

3. 二つの規定の相互関係。橋本氏によるその歴史的解明、論理的解明

生産的労働についての二つの規定、すなわち、一般的規定＝使用価値生産の規定と歴史的規定＝剰余価値生産の視点との相互関係は「対立物の統一」という弁証法的関係において把握すべきだというのが橋本氏の主張である。つまり、

Ⅶ-3 「…両規定が対立し、矛盾する根拠は、二つの側面から解明されるべきものである。一つの側面は、『資本への労働の服属過程』の考察によって歴史的に解明されるべきであり、他の側面は…『社会的観点』と『個々の資本の観点』とを明確にすることによって、論理的に解明されるべきであろう。」(橋本 勲 [1963] 46ページ)

一般的規定からはもともと「基本的には一応¹²⁶⁾」不生産的であったサービス労働が歴史的規定からは生産的労働になるのは何故かということが問題ではない。問題なのは依然として、サービス労働が一般的規定から使用価値を生産する労働か否か、特殊歴史的形態規定から剰余価値を直接生産する労働か否かということである。このことを抜きにしては「資本への労働の服属過程」の考察による歴史的解明も「社会的観点」と「個々の資本の観点」とを明確にする論理的解明も無意味なことになる。

橋本氏にあっては、遊部氏、西川氏等これまで批判してきた論者と同様に、サービス労働は「使用価値も価値も産みださない」という前提に立脚しているから、「一般的規定から不生産的である」ということになる。それにも拘わらず、サービス労働＝生産説を展開するには、なにか特別の「仕掛け」「媒介項」が必要となる。それに必要なプロセスが整えられたと言ってよいだろう。橋本氏の所説¹²⁷⁾は、概ね次のように要約出来る。

Ⅶ-4 サービス労働は「本来、労働過程に即した『質料的規定』『本源的規定』＝『一般的規定』からは、不生産的労働」であるが、「資本がサービス労働までも征服したばあいには、神秘化は発展し、完成する」(橋本 勲 [1965] 229, 228ページ) こと。

Ⅶ-5 その結果「…本来、労働過程に即した『質料的規定』＝『本源的規定』＝『一般的規定』からは不生産的労働であるサービス労働も、特殊資本主義的な『形態的規定』＝『歴史的規定』からは、生産的労働として現象する」(橋本 勲 [1965] 229-230ページ) ようになる。

Ⅶ-6 ところが、それは「顛倒関係」であり、サービス労働は「本来は『不生産的』であり、ただ、個々の資本家にとっては、また剰余価値観点から『生産的』となってあらわれるにすぎないのである。」(橋本 [1965] 230ページ。傍点—原文。以下—同様)

Ⅶ-7 橋本氏によれば「『社会的観点』とは、『本質論』の段階であり、『資本一般』の論理段階である。これに対して、個別資本の観点とは、『現象論』『競争論』の論理段階である」(橋本 [1965] 232ページ)¹²⁸⁾

Ⅶ-8 「サービス労働は本質論的規定においては、不生産的労働であっても、現象論的規定においては、生産的労働となって逆転しうるのである。サービス労働は現象においては生産的労働であるように『見える』のであって…『生産的なものとして現象するにすぎない』ものであり、仮象にすぎないのである。」(橋本 [1965] 235ページ)

橋本氏の所説においては、もともと不生産的労働が生産的労働になるのは、「視点の転換」「規定の相異」と説明するより方法がないと思われたものが、突如として「顛倒関係」が生じると主張することにより、「一般的規定」からは不生産的労働であったサービス労働も、特殊資本主義的な「形態規定」からは、生産的労働として現象するものの、それはあくまでも「仮象にすぎない」ものであるという。方法論の問題にも関係するので、節を改めて吟味することにしよう。

4. 方法論の問題

以上検討したかぎり、橋本氏の所説は一貫しているように見受けられるが、突如として激変する。

Ⅶ-9 「資本が直接的生産過程のみならず、サービス部門にまで進出し、サービス労働を征服するならば、今やサービス労働は『生産的労働』となって現象するのである。本来は、直接的生産過程において、物質的財貨を生産する労働のみが生産的であったが、その本質は次第に神秘化され、すべての労働が資本に剰余価値をもたらすかぎり生産的労働の規定を受けるようになってくるのである。」(橋本勲 [1965] 236ページ)

資本がサービス労働を征服するようになれば「『生産的労働』」となって現象する…すべての労働が資本に剰余価値をもたらすかぎり(橋本氏は金子ハルオ氏¹²⁹⁾のように、利潤をもたらすかぎり生産的

とはしておられない—引用者) 生産的労働の規定を受けるようになってくる」と主張される時の「生産的労働の規定を受ける」とは、どのような意味であろうか。

本来、一般的規定からすれば不生産的労働であるサービス労働¹³⁰⁾も、「歴史的規定=剰余価値視点からすれば、生産的である。…特殊資本主義的な歴史的規定=剰余価値視点からみれば、すべて生産的労働になる。¹³¹⁾」

換言すれば、サービス労働は「『一般的規定』からは不生産的労働」であるが、資本に包摂されるという契機を媒介として「生産的労働」になるということである。もしそうだとすれば、資本に包摂されるという契機があれば「すべての労働が…生産的労働の規定を受け…すべて生産的労働」になる。つまり、否定が肯定に転化するということである。

このことは方法論における基本的問題であるから、少し詳しく論じよう。普遍性・一般性と特殊性の弁証法的関係は拙稿「生産的労働についての一考察¹³²⁾」第三章「二つの規定の相互関係」で既に明らかにした。そのことをもう一度確認しておこう。

特殊なもの是一般的なものであり、一般的なものに通じる連関のうちのみ存在し、一般的なものは特殊なものうちのみ、特殊なものによってのみ存在するということであつた。それ故、生産的労働の特殊歴史的形態規定は、その一般的=本源的規定へ通じる連関のなかでのみ存在し、資本制的生産様式の下においては、一般的=本源的規定は特殊歴史的形態規定のうち、特殊歴史的規定によって存在するほかないということである。つまり、一般的規定において不生産的労働であつた労働は、如何なる契機が入つたとしても、その労働は生産的労働に転化することはありえず、依然として不生産的労働のままである。

「鶏の卵は適当な温度をあたえられることによって鶏に変化するが、温度がくわわつても、石が鶏にかわることができない」のは、「両者の根拠がちがう¹³³⁾」からである。外的条件が完全に整つても内的根拠がなければ変化しない。このことは、橋本説にも当てはまるであろう。

橋本説に即して、内在的に吟味してみよう。

- A 「…『一般的規定』からは不生産的労働」であるサービス労働は「資本がサービス労働までも征服したばあいには、神秘化は発展し、完成する」(本稿における引用 VII-4)
- B 「本来、労働過程に即した…『一般的規定』からは不生産的労働であるサービス労働も、特殊資本主義的な『形態規定』=『歴史的規定』からは、生産的労働として現象する。」(引用 VII-5)
- C ところが、それは「顛倒関係」であり「…個々の資本家にとっては…『生産的』となつてあらわれるにすぎないのである。」(VII-6)
- D 「サービス労働は本質論的規定においては、不生産的労働」であるが、「現象論的規定においては、生産的労働となつて逆転し…生産的労働であるように『見える』」だけであつて、それは飽くまでも「仮象にすぎない」(VII-8)

項目 A B C D における橋本氏の傍点、私が引いた傍線箇所をみるかぎり、誤りがあるわけではない。個々の項目 A B C D では誤つてはいないのに、何故か、何かを契機に「本来は、直接的生産過程において、物質的財貨を生産する労働のみが生産的であつたが、その本質は次第に神秘化され、すべての労働が資本に剰余価値をもたらすかぎり生産的労働の規定を受けるようになってくる」(本稿における引用 VII-9) というのである。

「サービス労働は使用価値生産に関係しないから、一般的規定では不生産的労働である」という前提に立脚しながらも、「すべての労働が資本に剰余価値をもたらすかぎり生産的労働の規定を受けるようになってくる」(VII-9) という理論を展開するには、何か特別な「仕掛け」「媒介項」が必要になってくるのであろう。

その「仕掛け」「媒介項」とは何であろうか。「資本がサービス労働までも征服したばあい…神秘化の発展, 完成」(VII-4)、『歴史的規定』から、生産的労働として現象」(VII-5)する。ところが、それらのことは飽く迄も「顛倒関係」である。つまり、サービス労働は「個々の資本家にとっては、『生産的』となってあらわれるにすぎない」(VII-6)のであり、「生産的労働となって逆転しうる」(VII-8)のであり、「仮象にすぎないのである」(VII-8)と言う。

つまり「…神秘化の発展, 完成」「…生産的労働としての現象」→「顛倒関係」→「生産的労働となって逆転」「仮象にすぎない」という「仕掛け」「媒介項」を経て橋本氏は、サービス労働＝生産的労働説を唱えるのである。

「サービス労働は使用価値を生産しない。それ故、一般的規定では不生産的労働である。」これが橋本説の大前提であったはずである。だとすれば、如何なる「契機」「仕掛け」「媒介項」が加わろうとも、「無から有は生じない」。このことに尽きるであろう。

一般的規定で不生産的労働であった労働は、どのような契機が入ろうともその労働が生産的労働に転化することはいえない。その労働は依然として不生産的労働のままである。この事実を抜きにした「顛倒関係」「神秘化の発展, 完成」「逆転」「仮象」という「媒介項」「仕掛け」を用いようとも、本質に変化は生じないはずである。「すべての労働が資本に剰余価値をもたらすかぎり生産的労働の規定を受けるようになってくる」(本稿での引用 VII-9) ことはいえない。それは依然として不生産的労働でなければ、論理的自己矛盾をきたす。

「…すべての労働が資本に剰余価値をもたらすかぎり生産的労働の規定を受けるようになってくるのである」は、別稿の注で次のように表現されている。

VII-10 「社会的観点において生産的とは、剰余価値を創造する労働であるのに対し、個別資本の観点では、その剰余価値を平均利潤の形成を通じて個々の資本にもたらす労働である。つまり個々の資本家に利潤の取得を可能ならしめる労働である。剰余価値を創造するのではない。」(橋本 勲 [1963] 59ページ)¹³⁴⁾

これは第V章で指摘した遊部久蔵氏の所説と同類と見なしてよいであろう。

橋本氏のこの所見に対して、次のような疑問が生ずる。

第1に、生産的労働の歴史的規定とは「直接に剰余価値を生産する労働だけが生産的」・「直接に生産過程で資本の増殖のために消費される労働だけが生産的」(本稿における引用 V-4) である。次に「直接に生産的な労働のように、これらの価値のそれぞれの大きさ・分量の原因としてではなく結果として作用する¹³⁵⁾」商業労働も、商業資本に買われた場合「商業資本にとっては直接に生産的である¹³⁶⁾」と極めて慎重に指摘されたものを「個別資本の観点」から「生産的労働」と固定的に把握してよいものであろうか¹³⁷⁾。

橋本氏に限らず、「○○の観点」「△△の視点」というのをこうも簡単に用いてもよいのであろうか。これらの概念の一例として、次のような突飛な疑問を許していただきたい。

「百貨店とは何か」という問いに次のような解答もありえよう。

A にとってはディートの場所である (むしろ、A の「観点に立てば…」と言換えても本質は変わらない)

B にとってはトイレである。

C にとっては電車のターミナルである。

D にとってはスケッチの対象である。

E にとっては休息の場所である。

F の「観点」から見れば、インテリアを学ぶ場所である。

いずれも、A, B, …F にとっては「事実」でありえても、百貨店を百貨店たらしめる本質を表現した解答とは言えないであろう。

橋本氏によれば、サービス労働も資本に包摂されると「神秘化」「顛倒関係」が生じ、「『一般的規定』からは生産的労働であるサービス労働も、特殊資本主義的な、『形態規定』＝『歴史的規定』からは、生産的労働として現象¹³⁸⁾」したものが、1963年論文では「個別資本の観点」からは生産的労働であると固定化¹³⁹⁾（「観点」が固定化すれば結論も固定化するの当然であろう）してしまわれた。これでは「観点の相異・変換」「視点の相異」というほかになく、「神秘化」も「顛倒関係」の説明も意味あるものとはなっていないように思われる。

結びにかえて

生産的労働についての論争が、戦後日本において数多く展開された。その中心課題はサービス労働の性格をめぐる論争であった。この論争における問題点の一つが方法論の問題、つまり、生産的労働の本源的・一般的規定と特殊歴史的規定の相互関係の把握にある。前稿「生産的労働についての一考察」は、二つの規定をどう理解するかという問題意識に基づいたものであり、本稿はその続きをなす。生産的労働についての研究が要請されるようになったのは、「はじめに」で紹介したように、国民所得論との関連においてである。

I章「都留・野々村説、上杉・廣田・田沼説批判」は、国民所得論との関連で考察を試みたものである。都留・野々村説、上杉・廣田・田沼説の根拠になったのが、アー・パリツェフ、ヘルムート・コツィオレク等の理論・「…国民所得の唯一の源泉は生産的労働である」（本稿における引用 E-2）「…住民の文化生活的サービス部門に従事する労働は、社会的観点からすれば生産的労働ではない」（引用 E-1）である。

都留・野々村氏の主張は「生産的労働とは、物質的富の生産の領域における労働であり、他人に対するサービスを生産する労働を含まない。後者は生産的労働である」（本稿引用 I-1A）。上杉・廣田・田沼氏は「…現在におけるブルジョア的国民所得論の特質の一つは、生産的労働と生産的労働を区別せず…『サービス』による所得を国民所得に算入することにある」（I-2C）という。

都留・野々村氏、上杉・廣田・田沼氏の所説においては「サービスは、物質、使用価値ではない」ということが前提となっている。その前提に立ち、マルクスの理論を自説に有利なように解釈しようとしている。

II章（補）「マルクスの生産的労働論」では、マルクスの理論を手短かに確認しようとした。無形の生産物であるサービスを「労働の物質化としての商品」（II-T-3A）と理解すれば、サービス労働＝生産説に対する反論の根拠となる。あと一つ、拙論で「サービス＝使用価値説」の根拠にしたのが「ある物の有用性は、その物を使用価値たらしめる」（Die Nutzlichkeit eines Dings macht es zum Gebrauchswert）（II-K-5）である。

Die Nutzlichkeit eines Ding という時の Ding は、英語の Thing と同じ意味で有形的な物（固体、液体、気体）物体を表す場合もあれば、無形の「もの」、物事を表す場合もあると解される。Ding が物財のことであると理解し「ある物の有用性は、その物を使用価値たらしめる」と理解したとしても、サービスに有用性があるか否か、あるとすれば「サービスの有用性はその有用性をして使用価値たらしめる」という命題が成立すか如何か吟味しなければならない。「サービスも一種の使用価値である」という理論が定式化出来るというのが、私の主張である。II章（補）第2節「マルクスの使用価値論、物質化論」での要点である。

III章「中村隆英説批判」。中村隆英氏は、生産的労働論の問題を国民所得論の問題でというより、経済計算技術上の次元で論じようとしておられるということである。「国民所得論の基礎づけとしての生

産的労働論を事実上放棄している」との阿部照男氏による批判（本稿での注 42）は当を得たものであると言えよう。

IV章では山田説、副田説を吟味した。

生産的労働の実質規定と形態規定との間にもし矛盾が起こるとすれば「実質規定が批判の拠りどころ」（IV-1）として重視すべきだと山田氏は言い、生産的労働の実質規定＝社会の産業資本の観点、形態規定＝個別資本の観点からの把握と定式化された。山田氏の定式化は、本邦初の試みだと思われるが—そのオリジナルはパリツェフ（注 50参照）だと思われる—副田説、遊部説、西川説、橋本説へと継承されることとなった礎石と言ってよさそうである。

「形態規定と実質規定との統一的な把握」と山田氏が主張される時の「実質規定」とは、事実上物質的財貨を生産するというものである。その意味では、両規定の統一を主張しつつも、内容においては第I章で批判した野々村説、上杉・廣田・田沼説を超えたものとはは言えないであろう。優れた問題意識にも拘わらず、残念という他ない。

副田氏は生産的労働の両規定に関して「剰余価値学説史と資本論のあいだにはいくらかの開きがある」（IV-5）と言いつつも、副田氏の基礎にあるのは生産的労働＝物的生産論である。副田氏の真骨頂は、IV-9A～9Cで引用した部分である。つまり、

「サービス業は…サービスを提供することによって生産価値または生産国民所得の分け前にあずかる…」「…サービス業者は本源的所得者の二階を間借りしているようなもの…一種の宿り木である。」（傍線—引用者）「彼らは労働過程の結果たる商品売るのではなくて、労働過程そのものを、その使用価値を直接に貨幣と交換するのである」

「二階を間借りしているような」「一種の宿り木」たるサービス業者は、労働過程の結果たる物的財貨を販売するのではなく、「労働過程」を販売する。労働過程そのものが売買出来るのかという本質的問題を抜きにすれば、その限りにおいて論理は一貫している。生産的労働における両規定を吟味した副田氏の優れた問題意識は、そこでストップしている。残念というほかない。とは言え副田説はその後、遊部久蔵氏、橋本 勲氏等へと継承される一里塚になったものと評価したい。

V章「遊部久蔵説批判」。

遊部氏は副田氏と前後し、自己の理論を展開された。遊部氏の出発点は、引用文V-1、V-2であり、同時に結論でもある。つまり、「生産的労働は物質的生産にかかわるもので…非物質的生産にはかかわらない。」「非物質的生産における労働力の機能が不生産的労働である。」何故なら、サービス労働においては「生産の物的成果が生まれず、むしろ生産行為そのものが使用価値である場合には、価値の形成される余地はなくなる」からである。

上のような問題意識、あるいは結論にも拘わらず「資本関係に包摂されているサービス提供者は、本源的意味では不生産的労働者であるが、資本主義的意味では生産的労働者である」（V-3）という。遊部説での問題点は「本源的意味では不生産的労働者である」サービス提供者が「資本関係に包摂」されると、「資本主義的意味では生産的労働者である」という「転換」である。

この「転換」を解く鍵が「資本主義生産の目的は剰余価値の取得にある。それは必ずしも剰余価値の生産を意味しない」（本稿における注 82）という論理である。この論理は、やがて橋本説に影響を与えることになるが、マルクスの生産的労働論の理解として正確かということに尽きよう。マルクスの生産的労働論の結論は「…直接に生産過程で資本の増殖のために消費される労働だけが生産的である」（引用 V-4）ということだからである。

蛇足ながらコメント。A.「資本主義生産の目的は剰余価値の取得にある。」B. そのことは「かならずしも剰余価値の生産を意味しない。」資本主義生産の目的としての理論に間違いがあろうはずはない。

問題は、マルクスの生産的労働論の理解として正確か否かということに尽きる。このような生産的労働論の理解が橋本説にも継承されるのを看過してよいものかということである。

VI章「西川清治説批判」。

「…不生産的なサービス労働も、資本に包摂されるかぎりには、国民所得の点でも無条件に生産的であるかに解する見解」が登場した時期に、「謂ゆるサービス労働をすべて生産的労働」との見解に「若干の疑問を提起」（本稿での注 87）しようと西川氏は論文を発表された。

それぞれの労働が生産的労働であるか否かは「社会的観点のもとに総過程の一環として、それがそこで占める地位と現実の機能を顧みて、生産の過程の一部に属するか、消費のそれに属するかが問題」（VI-2）だというのである。西川説は、生産されたサービスが再生産的に消費されるか否かを論争に持込もうとしたものである。しかもこの点が「基礎規定として必要」（注 100）というのである。

このような「基礎規定」から次のような結論がうまれるのは、当然の帰結である。

「…全く生産にかかわりのないサービス労働が資本によって雇われるに至った瞬間から生産的労働になると言うことも社会的観点のもとでは首肯しがたい…」（VI-3C）ここで西川氏が問題としておられる事態は、サービス労働が資本によって包摂され、そこで生産されたサービス生産物が生産、再生産的目的以外に、例えば個人的消費目的に、あるいは流通過程遂行のために用いられた場合である。このような際に「生産的労働になると言うことは社会的観点のもとで首肯しがたい」というのである。

西川氏において論理的矛盾があるわけではない。問題は、生産的労働論争へサービス労働の結果を持込むことの是非である。度々引用した理論、つまり「資本主義的生産の直接の目的および本来の生産物は一剰余価値であるから、直接に剰余価値を生産する労働だけが生産的」（V-4）である。このことに尽きる。

VII章「橋本 勲説批判」。

労働価値説を前提とする論争でも「…サービスは飽くまでも不生産的労働である」とする学派と「…サービス労働も…生産的労働である」とする学派があるのは、「生産的労働の規定に二つの観点が見られるからである」との結論に到達される（注 123）。橋本氏による「二つの観点」とは「労働過程からみた一般的規定」と「資本家的生産の下での歴史的規定」である。この二つの規定の相互関係は「対立物の統一」という弁証法的関係において把握すべきだという。

サービス労働は「使用価値も価値も産みださない」という前提に立つ橋本氏にあっては、当然のことながら「一般的規定からは不生産的労働」となる。それにも拘わらず、サービス労働＝生産説を主張するにはなにか特別な「仕掛け」「媒介項」が必要である。その「仕掛け」「媒介項」が橋本説の特色であり、その理論構成がVII-4～VII-8である。

橋本説における「仕掛け」「媒介項」とは何であろうか。それは「資本がサービス労働まで征服すると「神秘化は発展、完成」し、『歴史的規定』から、生産的労働として現象」するようになる。ところが、そのことは飽くまでも「顛倒関係」にすぎない。つまり、サービス労働は「個々の資本家にとっては『生産的』となつてあらわれるにすぎない」のであり、そのように「逆転しうる」のであり、「仮象にすぎない」ものであると言うのである。

サービス労働は使用価値を生産しない。それ故、一般的規定では不生産的労働である。これが橋本説の前提であった。そうだとすれば、如何なる契機が加わろうとも、サービス労働は歴史的規定で生産的労働に転化するものではない。そのように「あらわれるに過ぎない」もの、「仮象にすぎない」ものである。

戦後日本においても、生産的労働をめぐる数多くの論争が展開された。1955年前後から本格化した論争も、1970年頃には一つの到達点を迎えていたように思われる。論争の到達点、それは、「サービス

労働＝不生産的労働説」を唱えた金子ハルオ説の体系化と「サービス労働＝生産説」を唱えた赤堀邦雄説の体系化である。本稿ではその間における個別研究者の所説を吟味しようと試みたものである。従って、金子ハルオ説、赤堀邦雄説の検討は、今後に残された課題である。

注

66) 遊部久蔵 [1952] 21ページ。

遊部氏は次のようにも主張している。

「…生産的労働の本源的規定は…歴史的規定の外にあるもの、価値形成＝価値増殖過程の担い手化する以前の労働過程（いわば即自的労働過程）にかかわるものである。」（遊部 [1952] 24ページ。傍点—原文。以下一同様）

「一つはあらゆる時代にわたって共通する一般的な規定であり、もう一つはある特定の時代、さしあたり資本主義時代にのみ妥当する規定である。前者を本源的規定、後者を歴史的規定とよぶこととしよう。重要なのはこれらの規定をバラバラにとりあげるのではなくてその統一において把握することである。」（遊部 [1957] 2ページ）

「問題はむしろこの二つの規定の統一的理解にある。」（遊部 [1957] 19ページ）

67) Karl Marx *Das Kapital* Bd. I. S.56. 青木文庫版 第1分冊 139ページ。

「労働そのものは、その直接的定在・その生きた実存においては、直接に商品としてとらえることはできない。」（Karl Marx *Theorien* Bd. I. S.134. 青木書店 236ページ。国民文庫 第2分冊 42ページ。）

詳しくは、馬場雅昭 [1989] 21-23ページ参照。

68) 詳しくは、馬場雅昭 [1989] 第1章第1節～第4節を参照のこと。

69) 詳しくは、馬場雅昭 [1989] 第1章参照。

70) Karl Marx *Theorien* Bd. I. S.365. 青木書店 588ページ。国民文庫 第3分冊 185-186ページ。『諸結果』『マル＝エン選集』450ページ。国民文庫 122ページ。

ここでマルクスは「…この布をズボンに転形するという彼のサービス（すなわち彼の裁縫労働）」としている。その限りにおいて、解釈論としてサービス＝労働という解釈も有りうるということにしておこう。

71) 茂木六郎 [1958] 143ページ。

72) 詳しくは、馬場雅昭 [1989] 第3章第1節、第4節、補節を参照されたい。

「純粋に個人的消費目的のための個人的サービス」について、遊部氏は次のように述べておられる。

「資本制生産が発達するにつれて、しだいに生産的労働と不生産的との素材的区別があらわれる。…生産的労働はもっぱら商品、しかも物質的な商品…の生産に向けられた労働であり、不生産的労働は…個人的の勞務供給（persönliche Diestleistung）であるかのようにあらわれる。収入は…単なる勞務供給（それ自身使用価値として消費されるところのサービス）に対して交換されることとなる。」（遊部 [1952] 22ページ）

遊部氏による「個人的な勞務供給」＝不生産的労働の結果は、料理、衣服等の物質的財貨を産むことも、掃除、散髪、音楽、教育等物体に「対象化」しないこともある。

73) 本稿における引用II-T-3A, 3B参照。

74) Karl Marx *Das Kapital* Bd. II. S.50. 青木文庫 第5分冊 72ページ。

交通労働、交通業については、馬場雅昭 [1989] 第4章～第6章、[1999] 第4章参照のこと。

75) 遊部久蔵 [1957] 2ページ。

76) 詳しくは、馬場雅昭 [1989] 第3章第3節、第4節参照。

77) 馬場雅昭 [1989] 第3章第1節、第4節参照。

78) 馬場雅昭 [1989] 第1章第5節参照。

79) 遊部説の結論だけを見れば、注82)～85)のとうりであるが、結論にいたるプロセスは次のとうりである。賛同出来るものではない。

「非物質的生産のもとにおいて資本関係に包摂されているサービス提供者は、本源的意味では不生産的労働者であるが、資本主義の意味では生産的労働者である。…資本主義の意味での生産的労働とはいかなる意義を有するかということである。…これは全く生産的労働の現象形態、資本主義社会特有の表現形態の規定にかかわる…それはまさに生産的労働の資本主義的形態規定をあらわしている。…資本主義生産の目的は剰余価値の取得にある。それは必ずしも剰余価値の生産を意味しない。…個々の資本家にとっては彼が取得する剰余価値が彼のもとで働いている労働者の搾取によって直接得られたものか、社会的総剰余価値の再配分によるものであるかは、問うところではない。こうして剰余価値を資本家にもたらす一切の労働およびサービスが生産的労働としての意義を有することとなる。…この点に私は生産的労働の本源的規定と歴史的規程との統一を見出しうらと思う。」(遊部 [1957] 12-13ページ。傍線一引用者)

「剰余価値を資本にもたらす労働およびサービスが生産的労働としての意義を有する…。この点に私は生産的労働の本源的規定と歴史的規定との統一を見出しうら」と言うのであれば、私的資本に包摂された労働は利子生み資本に包摂された労働、商業資本に包摂された労働をはじめ、すべて生産的労働になるということになるであろう。とても、賛同出来る理論とは言い難い。『直接的生産の諸結果』における理論・本稿における引用V-4を支持したい。

80) 遊部久蔵 [1957] 2ページ。

81) 馬場雅昭 [2010] 第III章参照。

82, 83) 遊部久蔵 [1957] 12ページ。

84) 詳しくは馬場雅昭 [1989] 第7章, 第8章, [1999] 第2章参照。

85) 遊部久蔵 [1957] 12ページ。

86) 遊部久蔵 [1957] 13ページ。

87) 西川清治 [1964] 60ページ。

88) 西川清治 [1965] 「本源的意味における『生産的』という言葉は、もともと単に『物を生産する』という意味にほかならない…」(10ページ)

「言うまでもなく、生産的労働とは『物』したがって『価値』、ひいては『所得』を生産するということ以外のことを意味せず…」(22ページ)

89) 西川清治 [1964] 64ページ。「物的な労働対象…を欠く」労働があるのであろうか。

この規定の中に商業労働も含まれるのか如何かわからない。後でふれるように、サービス労働と商業労働を混同しておられるところから判断すれば、多分含まれているのではないかと思われる。

90) 西川清治 [1964] 65ページ。

91) 馬場雅昭 [1989] 第1章, 第3章参照。

92) 馬場雅昭 [1989] 第3章第3節, 4節参照。

93) 馬場雅昭 [1989] 第3章補節参照。

94) 馬場雅昭 [1989] 第1章参照のこと。

95) 長岡 豊 [1964A] [1964B] [1968]

96) 西川清治 [1965] 20ページ。

97) 西川清治 [1965] 15ページ以降。

98) 詳しくは、馬場雅昭 [1989] 第3章第3節, 第4節, 補節参照。

99), 100) 西川清治 [1964] 82ページ。西川氏は、また次のようにも述べておられる。

「…国民所得したがって社会的観点のもとで、生産的労働と不生産的労働との区別を考えるにあたっては…ある

労働が、資本主義的生産の過程の一環または継続として機能しているか、あるいは消費の過程の一部に属するか、を顧みることは、問題の解決を容易ならしめる…。…かような（国家および自治体を介する行政サービスのこと—引用者）問題に関しても、それが全過程の一環として生産に属するか消費に属するかという視角にたつことが、徒な混乱をさけ、問題の統一的理解をたやすくする…。」（西川 [1964] 69ページ）

- 101) 詳しくは、馬場雅昭 [1989] 第3章を参照されたい。
- 102) 馬場雅昭 [1989] 第7章, 第8章, [1999] 第2章参照。
- 103) 馬場雅昭 [1989] 第3章第1節, 第4節, 補節参照。
- 104) 馬場雅昭 [1989] 詳しくは第1章を参照されたい。
- 105, 106) 西川清治 [1964] 71ページ。
- 107) 詳しくは馬場雅昭 [1989] 第3章第1節, 第4節, 補節を参照されたい。
- 108) *Theorien* Bd. I. SS.121-124. 青木書店 218-222ページ。国民文庫 第2分冊 19-24ページ。
Resultate 『マル・エン選集』『諸結果』451ページ。国民文庫 123-124ページ。
- 109) *Theorien* Bd. I. S.122. 青木書店 219ページ。国民文庫 第2分冊 22ページ。
- 110) *Theorien* Bd. I. S.367. 青木書店 591ページ。国民文庫 第3分冊 189ページ。本稿における注 72) も参照。詳しくは馬場雅昭 [1989] 第3章第1節参照。
- 111) 西川清治 [1964] 71ページ。
- 112) 資本制的サービスの生産と消費については、馬場雅昭 [1989] 第3章第3節, 第4節, 補節を参照されたい。
- 113, 114, 115) 西川清治 [1964] 75ページ。
- 116) 西川清治氏は次のようにも述べている。
「…取引の対象という意味でサービスは或る種の商品としてうられるにしても、それはかならずしも価値を形成するわけではない。…サービス労働者と雖も労働者であり、その労働力そのものはもちろん価値をもち、それ相応の対価の支払いをうけるが、そのサービスの買い手にとっては全くその利用効果の消費にほかならず、したがって交換の対象たるべき新たな価値を形成し、且つこれを買手にもたらすものではない。尤もこの場合、サービスの成果が、吾々の生活にとっての大きな利用効果（使用価値）を意味するかどうかは、さしあたりその労働力の『価値』とは別個の問題である。」（西川清治 [1965] 19-20ページ。）
- 117) 西川清治 [1964] 71ページ。傍線—引用者。
- 118) 庭田範秋 [1960]
笠原長寿 [1956]
- 119) 橋本 勲 [1963] [1965] → [1970] に所収。
1963年発表の「サービス労働の生産的性格」は、1965年公刊の「サービスと生産的労働」の続稿をなすとのことである（[1965] 41ページ）が、本稿では公刊順に取扱う。
- 120) Karl Marx *Resultate* 『マル=エン選集』『諸結果』450ページ。国民文庫 123ページ。
- 121) 物品賃貸業については、馬場雅昭 [1989] 6ページ参照のこと。
- 122) 橋本 勲 [1963] 42-43ページ。 [1965] 210-211ページ参照。
- 123) 橋本 勲 [1963] 43ページ。 [1965] 210-213ページ参照。
- 124) 橋本 勲 [1963] 43ページ。 [1965] 211-212ページ参照。
- 125) 橋本 勲 [1965] 211-212ページ。
- 126) 橋本 勲 [1963] 43ページ。
- 127) 橋本 勲 [1963] 51-59ページ。
橋本 勲 [1965] 228-232ページ。235ページ。
- 128) 橋本 勲氏は別稿において次のように述べておられる。

- 「資本一般＝本質論の観点における規定は、個々の資本家の意識には逆転した表象をとってあらわれる…『個々の資本家』の意識には、サービス労働も生産的にみえるわけである。」（[1963] 56-57ページ）
- 129) 金子ハルオ説の吟味は、他日を期したい。
- 130) 橋本 勲 [1965] 229, 231ページ。
- 131) 橋本 勲 [1965] 231ページ。
- 132) 馬場雅昭 [2010]
- 133) 毛沢東 [1957] 37ページ。
- 134) 長岡氏による「剰余価値視点からみた歴史的規定」「利潤規定からみた歴史的規定」は、おそらく橋本氏のこの主張をさらに精緻化されたものと見なしてよいであろう。長岡豊 [1964A] 9-10ページ。
- 135) *Das Kapital* Bd. III. S.331. 青木文庫 第9分冊 429ページ。
- 136) *Das Kapital* Bd. III. S.333. 青木文庫 第9分冊 431ページ。
- 137) 「労働過程に即する一般の規定と価値増殖過程に即する歴史的規定とは、それぞれ相互に対立し、相互に他者を離れて独立して規定されている」（橋本 [1965] 223ページ。傍線—引用者）という橋本氏の見解から判断して、氏の「社会的観点」「個別資本の観点」とは、絶対的に対立したものと見なしてよい。一般の規定と歴史的規定とは、拙稿 [2010] III章で述べたように、「それぞれ相互に対立」しているが、その対立は「他者を離れて独立して規定されている」のではなく、「他者を前提にして」規定されていると見なさなければならない。弁証法は次のように理解したい。
- 「対立において、規定的反省、即ち区別が完成する。対立は同一性と差異性ととの統一である。その二契機は、ただ一つの同一性の中であって互いに差異するところの契機である。その意味で、二契機は互に対立した契機である。
- 同一性と区別とは〔いまや〕区別そのものの内部にある区別の二契機である。」（武市健人訳 『改訳 大論理学 中巻 ヘーゲル全集 第7巻』岩波書店 55ページ）
- 「…区別された存在は自己同一的であるからであり、即ち同一性が、その区別の地盤と要素とを形成するからである。言いかえると、差異的な存在は、まさにその反対者である同一性の中においてはじめて差異的な存在なのだからである。」（『改訳 大論理学 中巻』岩波書店 46ページ）
- 138) 橋本 勲 [1965] 229-230ページ。
- 139) 橋本 勲 [1963] 59ページ。

参考文献

- アー・パリツェフ [1954a] 「資本主義社会における国民所得理論の諸問題」『経済評論』1954年6月号→ヘルムート・コツィオレク、アー・パリツェフ [1954b] 所収。
- 遊部久蔵 [1952] 「『生産的労働』について」慶応義塾大学『三田学会雑誌』第45巻第5号→[1955] に所収。
- [1955] 『古典派経済学とマルクス』世界書院。
- [1957] 「生産的労働とサービス」『三田学会雑誌』第50巻第12号→[1964] に所収。
- [1964] 『労働価値説史研究』世界書院。
- 阿部照男 [1967] 「生産的労働と国民所得論—マルクスの生産的労働論を国民所得論の基礎論構築のために用いることの誤りについて—」中央大学『商学論纂』第9巻第4号→[1987] に所収。
- [1987] 『生産的労働と不生産的労働』新評論。
- 有沢広巳・中村隆英 [1955] 『国民所得』中央経済社。
- 上杉正一郎、廣田 純、田沼 肇 [1954] 「戦後日本における国民所得統計」『日本資本主義講座』第9巻 岩波書店。

Oct. 2011

生産的労働論争批判 (II)

- 笠原長寿 [1956] 「保険労働に関する一考察」『商学研究年報』第1集 明治大学。
- 金子ハルオ [1964] 「生産的労働と不生産的労働」『資本論講座』第3分冊 青木書店→ [1966] に所収。
[1966] 『生産的労働と国民所得』日本評論社。
[1984] 「生産的労働と不生産的労働」久留島・保志・山田編『資本論体系』第7分冊 有斐閣→ [1998] に所収。
[1998] 『サービス論研究』創風社。
- 坂田孝平 [1955] 「剰余価値と賃金」井汲卓一『剰余価値と利潤』青木書店。
- 副田満輝 [1956] 「生産的労働と不生産的労働—国民所得とサービスについて—」九州大学『経済学研究』第21巻第4号。
- 都留重人・野々村一雄 [1954] 「戦後の国民所得」『日本資本主義講座』第8巻 岩波書店。
- 中西健一 [1957] 「マルクスにおける交通=生産説の二つの根拠—交通生産説論争によせて—」大阪市立大学『経済学雑誌』第37巻第4号。
- 中村隆英 [1955] 『国民所得論』中央経済社。
[1964] 「国民所得論」『資本論講座』第6分冊 青木書店。
[1959] 「国民所得論の意義と役割」『経済評論』第8巻10月号。
- 長岡 豊 [1964A] 「生産的労働について」『福岡大学経済学論叢』第8巻第3・4号。
[1964B] 「生産的労働と価値」『福岡大学創立30周年記念論文集 経済学編』
[1968] 「サービス労働と価値—Reply—」『福岡大学経済学論叢』第12巻第4号。
- 西川清治 [1964] 「国民所得と謂ゆるサービス労働」大阪市立大学『経済学雑誌』第50巻第2・3号。
[1965] 「唯物史観と生産的労働—その観念論的歪曲の試みについての一検討—」『経済学雑誌』第53巻第5・6号。
[1967] 「書評 金子ハルオ著『生産的労働と国民所得』」『経済学雑誌』第56巻第6号。
- 庭田範秋 [1960] 『保険経済学序説』慶応通信。
- 野々村一雄 [1954] 「戦後の国民所得」『日本資本主義講座』第8巻 岩波書店。
[1957] 「生産的労働の概念」『思想』岩波書店 No.401. 1957年11月号。
[1958] 『国民所得と再生産』岩波書店。
- 橋本 勲 [1963] 「サービスの労働の生産的性格—生産的労働論争批判—」京都大学『経済論叢』第92巻第4号→ [1970] に所収。
[1965] 「サービスと生産的労働」『保険の近代性と社会性—久川武三教授退官記念論文集—』→ [1970] に所収
[1970] 『商業資本と流通問題』ミネルヴァ書房。
- 馬場雅昭 [1989] 『サービス経済論』同文館出版。
[1999] 『流通費用論の展開』同文館出版。
[2010] 「生産的労働についての一考察」『阪南論集—社会科学編』第46巻第1号。
[2011] 「生産的労働論争批判 (I)」『阪南論集—社会科学編』第46巻第2号。
- 廣田 純 [1974] 「国民所得論」日本経済学会連合編『経済学の動向』上巻 東洋経済新報社。
[1977] 「生産的労働と不生産的労働」『資本論を学ぶ』第II分冊 有斐閣。
[1982] 「国民所得論」日本経済学会連合編『経済学の動向』第2集 東洋経済新報社。
- ヘルムート・コツィオレク、アー・パリツェフ [1954b] 『マルクス・レーニン主義国民所得論』大月書店。
- 毛 沢東 [1957] 『実践論 矛盾論』岩波文庫。
- 茂木六郎 [1958] 「保管費用と運輸費に関する一考察—使用価値論に關説する—」(2) 長崎大学『経営と経済』第

76号。

森下二次也[1949]「国民所得と生産的労働」『経済評論』昭和24年3月号。

山田喜志夫[1962]「再生産と国民所得の循環」国学院大学『政経論叢』第11巻第4号。→ [1971] に所収
[1971]『再生産と国民所得の理論』評論社。

渡辺雅男 [1984]「サービス労働論の諸問題」久留島・保志・山田編『資本論体系』第7分冊 有斐閣→ [1985] に
所収

[1985]『サービス労働論』三嶺書房。

Karl Marx · *Das Kapital* Dietz Verlag 1953 『資本論』長谷部文雄訳 青木文庫。

訳文は長谷部訳を用いるが、訳文は必ずしもこれにとらわれるものではない。傍点—原文イタリック体。
傍線—引用者。

・ *Resultate des unmittelbaren Produktionsprozess* 1933 『直接的生産の諸結果』『マルクス＝エンゲルス選
集』第9巻 1954年 大月書店。『直接的生産の諸結果』岡崎次郎訳 1970年 国民文庫。傍点—原文イ
タリック体。傍線—引用者。 *Resultate* 『マル＝エン選集』『諸結果』と省略。

・ *Theorien über den Mehrwert* Dietz Verlag Berlin 1956 『剰余価値学説史』1957年 青木書店。『マル
クス＝エンゲルス全集版 剰余価値学説史』1 国民文庫 傍点—原文イタリック体。傍線—引用者。
Theorien と省略。

スターリン[1952]『ソ同盟における社会主義経済の諸問題』国民文庫。

(2011年7月1日掲載決定)